

母を知ってみたい

——テキスト分析者の試み——

John E. Ingulsrud

多様なテキスト分析技法を用いて40年間研究してきた。近年、歴史資料に言語学的分析を応用し始めた。本稿は幼児期に亡くした母が残したテキストを分析した。母は日記、手紙、雑誌記事、短編小説を書いていた。残っている中に日記がテキストの量が多い。ここでは日本での生活に注目し、談話、物との関係を記述する。更にテキストが持つ意味合いが、たといテキストが終結しても、後に続く人物とその行動、態度、気持ち、価値観に関わりがあることを指摘する。

テキストは人間ではない。そこにあるのは情報であり、それは大量なものである。6歳になる同じ月に母が亡くなった。それは1959年東京で起きたことだった。最後の思い出は母が表参道の櫛の下で吐いている姿だった。当時明治通りの交差点にあたる北西側のビル2階に衛生病院の診療所があった。そこから荻窪の病院に搬送された。後に2年足らずに父が再婚した。相手はカナダ出身の婦人宣教師だった。彼女は現在米国ミネソタ州セントポールの高齢者施設に住んでいる。その世話のために早期退職して近くのミネアポリスに来ている。

母の死によってトラウマを受けた。それは長く続きその現れは母に対する事柄についての無関心だった。60歳になる頃にその気持ちがようやく薄れてきて、積極的に母を知ろうと動き始めた。それは決して単純な探索ではなかった。母は日本での生活について日記を書いていた時は30代だった。読者である息子は60代なので、彼女の方が娘である年齢になる。従って私の方が世間に対して、日本に対して熟成した観点を持っている。同時に、母のテキストなので親子関係が存在する。そのために何か教えてもらいたい気持ちが避けられない。母がバタバタと病院に搬送されて子どもの見舞いも拒否されていたので最後の言葉を受けることがなかった。しかし、あるテキストを通してその言葉が告げられたと解釈ができるかもしれない。

1959年の2月に所属していた宣教師会の機関紙である *The Missionary* に記事を投稿した¹⁾。内容は静岡大学工学部の学生から寄せられた手紙を紹介したものだった。彼女は同年の5月に亡くなった。編集の都合で、その亡くなった同じ月の号に記事が掲載された。記事の冒頭にこう書いている。

As mothers, there are times when we must entrust our children to someone else—for an evening, a day, a week, or longer. No matter if they are babies, youngsters, or grown-up, how often our thoughts and prayers are for them, and we must trust that they are well and safe physically, mentally, and spiritually.

(母親として他人を信頼して子どもを預けることがある。それは一晩、一日、1週間、またはそれ以上の期間がある。常に思いと祈りが子どものためにある。子どもがたとい赤ん坊であれ、幼児であれ、大人であれ、健康と安全であることを信じなければならない。)

これは直接子どもに向けたテキストではない。一般論である。子どもを人に預けることがあることを述べている。更に、子どもが健康で幸せであることを信じなければならない。だからその「預けられた人」を受け入れよ、という意味だろうか。この言葉は60年間を通して響くことになる。

母のテキスト

名前はセルマ (Selma) だった。彼女はキャンザス州のルーテル教会の牧師家庭に生まれた。先天的心臓疾患による障害を持ち、寝たきりの生活を強いられていた。教育は家庭と養護学校だった。寝室生活だったのでよくラジオを聴いていた。1944年に彼女が持つ症状のための手術が開発されたという放送を聞いた。最初の手術は子どもを対象にしていたが、親と周りの人の援助で、東海岸のバルティモアにある Johns Hopkins University Hospital まで車で旅した。その病院で史上初めて大人を対象にした心臓疾患の手術に成功した²⁾。手術の後セルマは急に健常者になり大学に通い、仕事もする。

早い内から日記を書いていたが、子どもの頃のものはほとんどなくなっている。残っているのは手術後のものである。一方、手紙の量も多かった。父によると、セルマは毎日手紙を書いていた。しかしそれも殆ど残っていない。その理由で日記に注目した。なぜ日記を書いていたのか。もし記録を残すためであれば、読者が誰なのか。先ず著者本人が読者であることを想定できる。他には誰なのだろうか。

最初の研究作業として日記をデジタル化した。私はパソコンに文章を打ち込み、ファイルに保存した。その作業の中で気がついたのは日本語の多さだった。例えば、*taden* (停電)、*eki* (駅)、*nimotsu* (荷物)、*okyakusan* (お客さん)、等があった。これらを読んで理解できるのは本人または子どもだけだった。また、記録として日記を使用していたという手がかりもテキストの中になかった。例えば過去の日記を調べて必要な情報を得たというような箇所が見つからなかった。日記を忠実に書いていた理由と動機が謎だった。

すると、2020年にミネアポリス郊外の施設に住むセルマの友人から手紙が届いた。友人に寄せてきたセルマの最後の手紙が封筒に入っていた。長年それを大事に保管していたそうだった。私は好奇心を持って亡くなる1ヶ月前に書いた手紙を読んで見た。驚いたのは何も新しい情報がなかった。内容は日記と同じだった。そこで分かったのは、日記の機能が毎日書いていた手紙のためのデータベースだった。

物語の設定

セルマの日記の中にはあまり感情とか人に対する意見がない。意見とか感情は間接的に解釈しないとわからない。人に対するコメントがない箇所では、印象が良くないという理解もありうる。しかし、時々はっきり感情を示すこともある。ここではそのハッキリ示した箇所を取り上げてその問題を巡る物語を紹介してみたい。

1954年4月6日の記録にはこの様な表現がある、*We are in hot water* (我々はヤバイ立場にある)。これは、夫の問題だったが、複数形の代名詞を使うことによって、自分の問題として捉えていることが分かる。当時、浜松で宣教師館が建設中だった。先に車庫が出来て、家ができるまでに、父、母、姉と私の四人が工夫した車庫に住んでいた。宣教師館が完成する前に、同じ敷地内に小さな家を建てた。それは父が頼っていた日本人の同僚のためだった。

この物語は「物」である建物が中心にストーリーが出来上がっていく。先ず、理論的に考えてみるために談話におけるコミュニケーションの捉え方を20世紀半ばに遡って記述する。先ず、コミュニケーションと言語を論じた英国の哲学者ジョンオースティンとジョンサールは、コミュニケーションには意思と意図が不可欠だと主張した。談話が意図を表す発話で構成されていて、意図なしでは会話が成り立たないと論じた³⁾。この影響で言語教育は文法からコミュニケーションにおける発話へとカリキュラムと教科書が基づくことになる。一方、ポストモダンの思想家は意図の重要性に反論し、ジャックデリダは意図というのは談話の意味合いの一つにすぎないと指摘した。ロランドバルトは、絵とか写真のラベルを例に、意図は談話を調節する役目があると主張した⁴⁾。21世紀に入ると社会言語学の研究により、発話に意図と同時に必ずスタンス(観点)があると証明する。スタンスは発話者だけでなく、対話者との関係の中で構築されて、第三者との対応も含む⁵⁾。更に、コミュニケーションに人間以外の事柄が取り上げられるようになってきた。例えば、言語コミュニケーションには抽象論が極めて少ないことを指摘、多くは具体的なやりとりである。物とか物理的な現象についてコミュニケーションが行われている。従って、人間から環境へと向きを変えるようになりポストヒューニズムと呼ぶ学者が出てきた⁶⁾。同時にコンピューター等、技術を中心に談話構成される Actor-Network Theory (ANT) という分析理論も登場した⁷⁾。また、物理学や生物学等、理系分野を取り入れた談話分析理論が更に登場し、The New Materialisms と呼ばれることになった。物と意味合いが「巻き込まれている」ことを主張し、それらの関係が如何に複雑に混在しているかを細かく分析する⁸⁾。理系分野と政治学が関わることの魅力によって、物を談話分析に取り入れる理論の中で後者の The New Materialisms に定着しつつある。

今回取り上げるテキストに建物を中心にテキストが構築されている。この物理的な事実が登場する人物の談話に巻き込まれている。家を建ててあげた人を「Kさん」と呼ぶ⁹⁾。彼はアメリカに留学してスタンフォード大学の工学部を卒業した。その後帰国してある期間、旧制熊本第五高校で教えていたそうだった。それから満州に渡りそこで働いていた。戦後に引揚げ、故郷の静岡県伊佐郡三ヶ日町(現浜松市北区)に戻った。彼はクリスチャンだった。浜松に来ていたルーテル教会の宣教師に、浜名湖地域に宣教師を送るようお願いが来た。その仕事のために私の父が選ばれた。

父は東京で1年間集中的に日本語を学んだが、あまり進まなかった。彼はKさん(本人は「先生」

を拒否していた)に頼っていた。先に身寄りのないKさんのために家を建てたのがそれだけ頼っていた現れだった。この行為は、現地のミッションから厳しい批判を招いた。たとい父が自費で建てたにもかかわらず、宣教師館の敷地内に日本人のために住宅を建てるのはルール違反だった。これに対して父が長々な手紙を書いた。建ててしまって仕方がないと拒絶する父にその批判が続く。

当時、ミッションの会長が愛知県岡崎市に住んでいた。珍しいことに会長と奥さんはテキサス州出身だった。大多数の宣教師はアメリカ上中西部出身のノールウエー系2世だった¹⁰⁾。会長夫婦もノールウエー系だったが、19世紀にある小さな開拓団がダラスの近くに住み着いた¹¹⁾。

その頃、私はまだ乳幼児だった。10ヶ月前に東京で生まれた。セルマは私を連れて近くの宣教師館を訪ねた時、主人が留守してお手伝いさんも具合が悪く帰宅していた。娘を岡崎まで迎えに行く人がいないという問題が生じていた。

...there was no one to go to Okazaki to get M today.

娘のMは、会長夫婦のお宅で下宿していた。同じ歳の娘がいて二人で名古屋の学校まで通っていた。週末(金曜日)になると家族のどなたかが岡崎まで迎えに行くことになっていた。

Since John E. is almost weaned, I volunteered to go.

そこで突然セルマは自発的に迎えに行くことと提案した。その提案を可能にしたのは私が離乳になったからだった。母親だったセルマは生物的に子どもに縛られていた状況から解放されたと解釈できる。

Left at 1:00 p.m. Changed trains at Toyohashi. Arrived in Okazaki and went to H's. Had coffee with F and visited about an hour.

浜松を13時に出発して、豊橋で名鉄電車に乗り換えて東岡崎駅で降りた。会長夫人(F)と1時間お話をした。その内容について説明はない。セルマはアメリカ南部の境界地域であるキャンザス州出身だった。音声記録を聞くと彼女は北部方言に基づく標準アメリカ英語を喋っていた。ただ、彼女の母と弟の言葉は南部弁だったことは私が知っている。従って彼女も南部弁を喋れたはずだった。どの様にKさんの家のことをアピールしたか。自分の病歴に触れて近くに英語話者がいてもらうことが安心だと言ったのか。それは分からない。

Then went back to the eki to meet M. We changed at Toyohashi and had an hour wait. But it is a large new eki. So we had tea and then looked around at all the booths.

ようやく名古屋から小学生が着く時間になって東岡崎駅に戻った。直接Mと一緒に豊橋に向かった。豊橋では東海道線の普通列車に乗り換えなければならなかった。名鉄電車とは必ずしも連絡がなく1時間も待たなければならなかった。そこでセルマは豊橋駅が大きくて新しい駅だったことに気づく。そしていろんな店があってそれをずっと見て回った。確かに昭和25年に豊橋駅が改装さ

れて、まだ地方では珍しい駅内商業施設が設けられていた¹²⁾。

その後、Kさんの家問題は日記に触れることがなかった。2020年5月に家族の書類を整理している時に、アメリカにあるミッション本部から父宛の手紙を見つけた。そこには「他国にもよく起きる問題だ」と書かれて、「今回は大目に見ましよう」という結論に至っていた¹³⁾。一応問題は解決することになった。

この時点で物語を切るとロマンになる。シンデレラの様にみんなずっと幸せに生きることになる。ロマン (*Bildungsroman*) というテキスト形態は、少年マンガを初め、小説、テレビ番組、教育原理まで現代文化の隅々まで当たり前になっている。それだけではなく、プラス思考、精神的に毎日をやって行くための楽観性もロマンに基づいている。ロマンには朝日の様に未来を照りつけるイメージがあり、後に時間が続くことが不可欠な条件である。教育の場合、学びの瞬間に時間が続かないと無意味になる。教育は常に未来へ向くことである。良い話はロマン。良い話を潰すのは死である。後に時間がないからである。ただ、テキストは人間のように死んですぐ終わることはない。その終結を通して響くこともある。

ここでは母の日記からロマン式物語を取り出して紹介した。彼女の日記がどんどん続く。同時に登場人物とその物理的環境も続く。それらがどうなったのか、テキストとその未来に注目したい。

テキストが響く

セルマが亡くなる前の年に家族はアメリカに住んでいた。1958年の6月から一年程の定期帰国期間があった。その間に両親は会議とか教会訪問で忙しかった。それだけではなく、セルマは運転免許証を持っていなかった。日本に行く前にアメリカの都会には路面電車等、公共交通機関が普及していた。離れていた6年間にアメリカが劇的に自動車社会に変わった。更に、与えられた住宅は都会ではなくミネソタ州南部の小さな町だった。父が留守になると、買い物もできない不便を経験した。早く浜松に戻って安定した生活に復帰したいと夫に言っていた。しかし、帰国期間が一年以上というルールがあった。そこで二人はいろいろ思考作業をして、その結果、父が日本の新学期に間に合うために3月に戻り一学期東京で日本語を勉強することを提案した。ミッション本部は、Kさんの家マター等によって父の日本語能力についてよく伝わっていたので許可を与えた。日本に着いたら世田谷区東玉川に家を借りてそこから父は渋谷の東京日本語学校に通い始めた。その期間にセルマは病気になった。その病気は以前から抱えていた心臓病ではなく脳ガンだった。

セルマは離乳期になった私を置いて岡崎まで飛び出した様に、アメリカ社会から家族を連れて飛び出した。彼女は日本に戻ることができたが、念願の浜松には至らなかった。この傲慢な行為は、たとえ本人が意識していなくても、結果的に子どものために日本を確保してあげた。なぜなら、もしアメリカで7月まで通常に残っていれば、そこで亡くなったことになった。その場合、子ども3人つきの寡男を絶対現地に送り返すことはなかった。父は、神学校同級の牧師と同じ様にアメリカ上中西部の農村教会を転々としたキャリアをおくっていたに違いない。

家族が浜松に戻るとKさんがまだ住んでいた。ある日、母をこいしくなって妹と一緒にKさんの前で大きく泣いた。彼は私たちを向かず、近くに立っていたお手伝いさんに対して「母親を亡く

すのは辛いな」と言った。その言葉は不思議に癒してくれた。つまり、一般論には孤独がない。

2年後父が再婚した頃、Kさんには認知症の症状が見えてきた。父は、1954年にKさんの家について決着をつけることができたが、その反面、Kさんを引き受けることで責任と義務を負うことになった。1961年に、近くに十字の園という日本初の特別養護老人ホームができた¹⁴⁾。そこは三方原という浜松市街から北に延びる広い台地にあった。Kさんはその施設に移った。2020年5月に家族の書類を整理する中に、十字の園からの領収書が出てきた。父にとってかなりの出費だった。

Kさんはあまり施設での生活になじまなかった。他の住民と喧嘩したりしてしまった。その後、訪ねた時に雑木林の中の古家に住んでいた。大人から見れば、施設が配慮した措置をとって一人で暮らせる空間を設けてくれた。しかし、子どもの目からはその雑木林があまりにも暗くて寂しかった。Kさんを見て泣いた記憶がある。なぜ人生の末期がこんなに辛いのか。まるで死を迎える孤独が前倒しされている。

2017年に義母であるグレイスが90歳になった。もうその頃から本人が意識しない認知症の症状が出ていた。見守っていた彼女の親戚がもう世話ができないと言ってきた。遠くに住む我々家族に対して責任放棄だと指摘した。そこでグレイスの子どもを含めた5人兄弟で協議した。その結果、移住可能なのは私だけだった。そのために早期退職して、今まで企画していた引退生活を断念した。気に入っていた東京の家にもっと住んでみたかった。同時に、温暖な加州の高齢者コミュニティにも予約をとっていた。代わりに木葉の寿命が6ヶ月足らずの厳しい気候を持つアメリカ上中西部に来ることになった。セルマが書いた記事の言葉は今度、硬い現実になった。これからは自分が預けられるのではなく、預ける番になった。こうして義母の責務を背負うことになった。彼女に対する感謝がなかなか湧き出てこなかった。しかし、色々苦労しただろうが、家に来てもらってとても良かった。そのことは写真アルバムを見ると明らかである。

退職してから間もなく私は2020年4月にミネアポリスに移住してきた。その頃は新型コロナウイルス感染の激しさが増していた。グレイスが住んでいた施設では職員、住民に感染が相次ぎ死者も出ていた。職員の感染が多くなり人手不足が生じた。基礎介護講習6時間のビデオが関係者に発信されて、事務職、ソーシャルワーカー、牧師、我々保護者が、最悪事態に備えて、講習を受けた。州の保健局が高齢者施設に対して厳しい規則を下して、グレイスと全く面会することができない状況になった。それだけではなく、住民同志の接触も禁止されていて部屋に閉じ込められていた。唯一の連絡手段は電話だった。何もしてあげられない中でその会話が綺麗言で終わった。グレイスは以前住んでいた部屋から移動させられて、新しい部屋の状態が把握できず、何が必要なのか全く分からなかった。職員も余裕がなく暑い個人用保護具を着たまま違和感を持ちながら最小限度の介護を行っていた。

その最中にグレイスへの態度が変わった。個々の関係、個々の歴史ではなく、グレイスが広い人間の苦しみの中に見えてくるようになってきた。感染防止に伴うマスク、保護具、距離間、隔離、消毒、ゴム手袋などの物理的環境に巻き込まれて、それが三方原の雑木林の様に圧迫感を与えていた。その時は子どもの主観だったが、今度は大人として客観的な無力さに圧迫させられていた。しかし、あの時と同じ涙を流した、「なぜ人生の末期がこんなに辛いのか。まるで死を迎える孤独が前倒しされている」。こんな状況を通して生きることで義理から人情へと旅立つことができた。

テキストは人間ではない。そこにあるのは大量な情報である。それは単なる知識ではなく、時と

ともに響き打ちあう意味合いである。

注

- 1) Ingulsrud, L., Mrs. (1959). A lesson for the teacher. *The Missionary* 22 (3), p.16.
- 2) 2003年にテレビ映画が作成された。Partners of the Heart <https://www.pbs.org/wgbh/americanexperience/films/partners/> (accessed 10/25/2020).
- 3) Austin, J. L. (1962). *How to do Things with Words*. Oxford, UK: Clarendon Press.
Searle, J. (1969). *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 4) Derrida, J. (1988). *Limited, Inc*. Evanston, IL USA: Northwestern University Press.
Barthes, R. (1977). *Image Music Text*. New York: Hill & Wang.
- 5) Du Bois, J. (2007). *The Stance Triangle*. Philadelphia: John Benjamins.
Fairclough, N. (2003). *Analyzing Discourse: Textual Analysis for Social Research*. New York: Routledge.
- 6) Deleuze, G. & Guattari, F. (1987). *A Thousand Plateaus: Capitalism and Schizophrenia*. London: Continuum.
Haraway, D. (1991). *Simians, Cyborgs, and Women: The Reinvention of Nature*. New York: Routledge.
- 7) Latour B. (2005). *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network Theory*. Oxford: Oxford University Press.
- 8) Barad, K. (2007). *Meeting the Universe Halfway: Quantum Physics and the Entanglement of Matter and Meaning*. Durham, NC USA: Duke University Press.
- Coole, D. & Frost, S. (Eds.). (2010) *The New Materialisms: Ontology, Agency, and Politics*. Durham, NC USA: Duke University Press..
- 9) 本稿のために証明する書類を得ることができなかったので名前を省略する。
- 10) Allen, K. & Ingulsrud, J. E. (2016). *The Norwegian-American Lutheran Experience in 1950s Japan: Stepping up to the Cold War Challenge*. Lanham, MD USA: Rowman & Littlefield.
- 11) Norwegian Society of Texas. https://www.norwegiansocietyoftexas.org/content.aspx?page_id=22&club_id=550176&module_id=326611 (accessed 10/25/2020)
- 12) 国鉄(昭和25年)豊橋民衆駅(民衆駅第一号)の誕生、<https://jaa2100.org/entry/detail/058452.html> (accessed 10/25/2020).
- 13) Lars M. Ingulsrud correspondence, 1953 – 1955. (In author's possession).
- 14) 十字の園 <http://www.jyuji.or.jp>; 聖隷聖クリストファー大学 <https://www.seirei.ac.jp/category01/guide/history.php> (accessed 10/25/2020).